



工藤美樹学術集会長

第69回日本産科婦人科学会学術講演会が開催されました。久々の地方都市での開催でしたが、天候と桜に恵まれ7377名のご参加を頂きました。広島市は国際平和都市でもあり、本学術講演会のテーマを、「平和と歩む 産婦人科医学・医療」としました。特別企画として、放射線影響研究所の児玉和紀先生に原爆放射線健康影響調査と世界の被曝者医療への貢献についてのご講演を頂きました。

本学会の方針として学術講演会の国際化を推進し、International Sessionの応募が国内467題、海外66題と例年以上の数でした。最高評価演題はJSOG Congress Award候補演題として「International Session of JSOG with other Asian Societiesを開催しました。また「International Workshop for Junior Fellows (I-WJF)」の直前には、Vaish先生から「臨床医がアカデミックキャリアを積み上げるには何を話したかったですか。I-WJFのテーマは「婦人科がん検診の現状」。「漢方

て、次ぐ評価の演題でInternational Session Workshopを構成しました。残念ながら、他の講演とも時間帯が重なったため、内容が専門的であったためか、聴講者が少なく今後に課題を残しました。

学会のメイン企画であるシンポジウムは、「1. 周産期における炎症その生理と病態」、「2. 生殖医学の最先端：不妊症治療におけるブレイクスルーを目指して」のテーマで開催されました。シンポジウムに先立って、Oxford大学のRedman先生から妊娠高血圧症候群の発症病態と母体炎症について講演をいただき、連続して討論としました。今回のシンポジウムは専門医機構ポイント付与プログラムとしたため、若手研究者へのメッセージを含めた構成とし、アンケートでも高い評価をいただきました。



会期：2017年4月13日～16日
会場：広島県立総合体育館（広島グリーンアリーナ）、リーガロイヤルホテル広島、NTTクレドホール

アジアの国々の産婦人科学会・医療に対する国際協力の発表として「Collaboration of JSOG with other Asian Societiesを開催しました。また「International Workshop for Junior Fellows (I-WJF)」の直前には、Vaish先生から「臨床医がアカデミックキャリアを積み上げるには何を話したかったですか。I-WJFのテーマは「婦人科がん検診の現状」。「漢方



治療の適応と展望」「助産師と共同する分娩と産褥管理」で若手の盛んな討論が行われました。

医学者を対象とした「医学生フォーラム」は3つの問題「不妊治療について」「HPVワクチンについて」「産婦人科医師を増やすために」をテーマに、医学部6年生がグループ討論を行い、例年通りの盛り上がりでした。また、一般演題はInternational Session「日本語セッション」ともに過去にない多数の応募をいただきました。ポスターは前2大会と同様に自由討論形式の実施としましたが、アンケート結果では現方法の賛成が多いものの、運営は改善の余地が認められました。

広島大学は初めて本学術講演会を主催させていただきました。不慣れな行き届きませんが、医局員にとつて貴重な経験になったことと思えます。第70回がますます盛会でありますよう祈念いたします。

学会中にはeポスターによる発表もさせていただきました。1分間のプレゼンテーションのあとに質疑応答でしたが、ACOG全体として臨床研究や公衆衛生、そして研修制度に力を入れているようで、私の基礎的な話にはほとんど興味を示されず、臨床研究と基礎研究の区別が明確にあるのだからと感じました。
(熊本大学大学院生命科学部 産科婦人科学分野 眞賀正彦)

Sharp Mary Birch Hospitalを見学する機会がありました。年間9000件以上の分娩を扱い、20個の分娩室と90床のNICUを所有する西海岸で最大の施設でした。勤務する医師は産科や婦人科と自身の専門を極めておりそれに集中できるシステムとなっていました。病院見学では医療者も患者も居心地の良く過ごせる工夫が各所でなされているアメリカの医療現場を肌で感じることができ、非常に貴重な経験となりました。
(慶應義塾大学医学部産婦人科教室 南木佳子)

日米若手医師交換プログラム参加体験記

The American College of Obstetricians and Gynecologists

ACOG

米国産科婦人科学会



ACOG2017参加報告 名古屋大学 梶山広明

私自身としてもACOGには初参加となりましたが、今回随行幹事としてご一緒させていただきました。初日はopening ceremonyやpresident's program lectureに出席し、昼はランチセミナー形式でresident reporter & Japanese delegation lunchに参加しました。午後は各自事前に選択したプログラムに分かれて聴講いたしました。2日目は各自教育プログラムに参加しました。午後は若手メンバー全員が各自の研究テーマでe-poster発表です。最初に個別のshort presentationがありましたが、みな立派に英語で発表されていました。3日目はConvocationに参加しました。Convocationとはレジデントプログラムの修了式のようなセレモニーで、修了した若手医師全員がACOGのオフィシャルカラーであるグリーンのアカデミックガウンを着て1人1人presidentから修了証を手渡される卒業式のような感じでした。日本では大学卒業後にこのようなセレモニーはありませんが、一つの節目を迎えて医師として新たな出発を図る上ですばらしいイベントだと感じました。午後はSan Diego郊外にあるSharp Maternal Children Hospitalに病院見学に行きました。夜はpresident's PAC partyに参加しました。大変にぎやかな交流パーティーでした。最終日はJunior fellow breakfast business meetingに参加しました。朝食をとりながら、ACOG Junior fellow 活動についての各種プレゼンテーションを聴講致しました。産婦人科の未来を担う今回の若手参加者同士の出会いも大変有意義であったと感じました。本プログラムに参加することにより彼らは普段は体験出来ない多くの経験を積み出すことができたと確信します。



ACOGの主なプログラム内容は日産婦のような研究成果発表ではなく、「医師の教育」でした。どの教育セミナーでもガイドラインの話が出てきます。日本と比べてガイドラインの数は多く、医師は細かいガイドラインの内容を知る必要があるようです。医者の負担は大きいですが、医師の教育にとっては合理的だと思いました。これらのACOGの取り組みが、医師の教育水準を高めているのだと思いました。
(昭和大学藤が丘病院 竹中 慎)

ACOGは特に近年の帝王切開率の上昇を問題視していた。現在の割合が約3割で年々上昇しているとのこと、この点については日本も同様ではあるが、大きな違いはその解決法としてACOGはVBACを推奨しているということ。この流れが世界においてどう受け入れられていくのか、非常に興味深い。既に巨大施設での分娩が常識となっている米国ならではの方針かもしれない。
(大阪大学 久保田哲)

日本産科婦人科学会の若手医師育成プログラムの企画として、2017年5月6日から10日まで米国カリフォルニア州サンディエゴで開催された米国産科婦人科学会(American Congress of Obstetricians and Gynecologists: ACOG)のAnnual meetingに参加させていただきました。このプログラムは、日本と米国の若手の医師を互いの国に派遣し、交流を行うことを目的としており、日本からは6名の若手医師が参加しました。



学会の内容に関しても、LGBTの問題や更年期のsexual activityなど日本ではあまり触れられない話題が数多く取り上げられており、文化によって産婦人科医への需要もまた異なることを肌で感じました。さらに医者自身のメンタルヘルスのセルフマネジメントや医療ミスへの対処などに関してもレクチャーが行われており、医療の周辺領域に対する教育も重視されていることが印象的でした。
(東京医科歯科大学 齊藤和毅)

アメリカは制度や形式、資格というものをとても重要視しています。倫理観のある心構えを備えた人が、資格を持ち、その人がまたたくさんの教え子を、確立された制度の元で教育することで、アメリカ全体としての医療のクオリティが担保されていく。そのために学会側は、最初の心構えをちゃんと講義する必要があります。講義を聞く側も、賞の受賞などを通じて、上昇志向の自覚を育てていく。本学会にはそんな意味合いがあるのだらうと感じました。
(東京医科大学 長谷川朋也)

産婦人科の魅力は女性の生涯を担い、また次世代の誕生を担うことだと思えます。実習や研修を通して、周産期だけではなく、良性腫瘍から悪性腫瘍、生殖医学、女性医学など幅広い領域があることやそれらが繋がっていること認識し、最初に述べた魅力を感じて選択しました。幅広い分野があることや外科治療も内科治療も行っていけることは、医師としてやりがいがあることでもあり、自分に適した分野が見つかり、より専門性を高めていくことができることだとも思えます。



女性の生涯をサポートしていけるように

私はまだ、医師として学ばなければならないことが多く、知識不足や技術不足に苦悩する日々です。母として仕事と子育ての両立は、時間に縛られて悔しい思いをすることもあれば、我が子に癒されることもあります。大変なことも多いですが、知識や技術を習得した分だけ、より患者さんを理解し、サポートにつながると思えます。病気ではなく人間をみながら女性の生涯をサポートしていけるよう研鑽を積みみたいと思えます。

日本大学医学部附属板橋病院・河野 愛

研修医の声

研修医の方々に、産婦人科を選んだ理由や、産婦人科に寄せる夢を語って頂きました。

志すきっかけとなったのは学生時代にお産をみて感動し、その際に「病院にきておめでとうと言ってあげられるのは産婦人科ぐらいじゃないかな」と担当の先生に言われ、これはなるしかない!!と思ったからです。研修医として産婦人科を3カ月ローテートし、周産期以外にも、腫瘍、生殖内分泌、女性医学といった様々な分野があり、女性のライフステージに沿って長期間にわたり関わることができるという点にも魅力を感じました。幅広い分野があり、内科的・外科的な面を併せ持つという特性上多くのことを学ばなければならない大変さはあると思いますが、その分やりがいがあるとも感じています。自分と同年代の患者さんも多く、子宮頸癌などの悪性腫瘍、切迫早産の長期入院であったりと状況は異なりますが、治療以外のことでも様々な相談をされることがあり、色々な面からサポートできればと感じています。まだまだ学ぶことは山積みですが、一人でも多くの女性の力になれるよう、日々努力していきたいと思っています。

一人でも多くの女性の力になれるように

志すきっかけとなったのは学生時代にお産をみて感動し、その際に「病院にきておめでとうと言ってあげられるのは産婦人科ぐらいじゃないかな」と担当の先生に言われ、これはなるしかない!!と思ったからです。研修医として産婦人科を3カ月ローテートし、周産期以外にも、腫瘍、生殖内分泌、女性医学といった様々な分野があり、女性のライフステージに沿って長期間にわたり関わることができるという点にも魅力を感じました。幅広い分野があり、内科的・外科的な面を併せ持つという特性上多くのことを学ばなければならない大変さはあると思いますが、その分やりがいがあるとも感じています。自分と同年代の患者さんも多く、子宮頸癌などの悪性腫瘍、切迫早産の長期入院であったりと状況は異なりますが、治療以外のことでも様々な相談をされることがあり、色々な面からサポートできればと感じています。まだまだ学ぶことは山積みですが、一人でも多くの女性の力になれるよう、日々努力していきたいと思っています。

京都府立医科大学 産婦人科・田村祐子

